

新島遺品庫より

— collection 3 —

懐剣—八重の覚悟—



懐剣 刀身



懐剣 拵

新島八重の愛蔵品の一つに、懐に忍ばせるための刀がある。通称懐剣と呼ばれる。かつて八重が1932(昭和7)年5月24日、京都付近配属将校研究会の会員に話した言葉の中に「着用した着物は(筆者注)戦死シタ弟ノ着物デアリマシテ、袖ニ血ガツイテゴザイマシタカラ、袖ダケ切ツテ他ノ切デ著代ヘタモノデゴザリマス。刀モ弟ノモノヲサシテ、懐剣ダケハ自分ノヲサシテ居リマシタ。私ノ名ヲ誰モ申ス者ガナクツテ三郎ト申シテ居リマシタ」(吉海直人『新島八重子刀自懐古談』の紹介―全文翻刻―)『同志社談叢』第20号同志社社史資料室2000年3月102、108頁)という言葉がある。これは、1868(慶應4)年8月23日に始まった若松城(鶴ヶ城)籠城戦時に自らまとっていた服装に関する語り部分である。のち、八重は1901(明治34)年に籠城戦時の姿を再現し、写真(中央)に残した。写真には、手に銃を取り、大小刀を指して、籠城しようとする往時の八重の姿が再現されているが、八重によれば籠城戦時には胸元に懐剣を忍ばせていたという。



この懐剣の作者は「為国」で、慶長以前の作品と考えられている。つまり、豊臣秀吉の時代、もしくはそれ以前から、この世に存在していた可能性がある。刀身には、現在は分りにくい、龍が彫られていた形跡があり、かつては見ても美しい刀であった。持ち(もて)時代を感じさせる。おそらく、この懐剣は、八重が籠城戦入城時に所持したと考えよう。

現在同志社には会津時代の八重を物語る資料は、この懐剣以外には存在しない。籠城戦を経て敗戦を経験し、兄・覚馬は行方不明、父・権八と弟は戦死という、家族の男手全てを失った八重は、一時米沢に身を寄せ、その後兄を頼り京都へやってきた。女性だけの家族が取り残された時、他人のもとに身を寄せねばならなかった時、兄の生存を知り、それをよすがとした時など、故郷から京都に至るまで、懐剣は様々な経験をしてきた八重とともに京都にやってきた。そして、京都で約41年間、八重が手放さなかった愛蔵品でもある。八重の生き方を貫く覚悟と矜持を今に伝える資料と言えよう。

(同志社社史資料センター)